江戸時代、幕府公認の色街として誕生した吉原遊廓。ここでは長い歴史の中で、多くの女性たちが非人道的な扱いを受け、理不尽な売買春が繰り返されてきました。しかし一方では、年間を通じて花見や仮装行列といった様々な催しが企画され、当代の文化人たちが身分を越えて集い、最先端のファッションが生まれる、老若男女が注目する文化の発信地でもありました。人々の「行ってみたい」「見てみたい」という好奇心に応えたのが浮世絵。今回は、遊女たちの一日を描いた歌麿の浮世絵シリーズ「青楼十二時」をご紹介します。

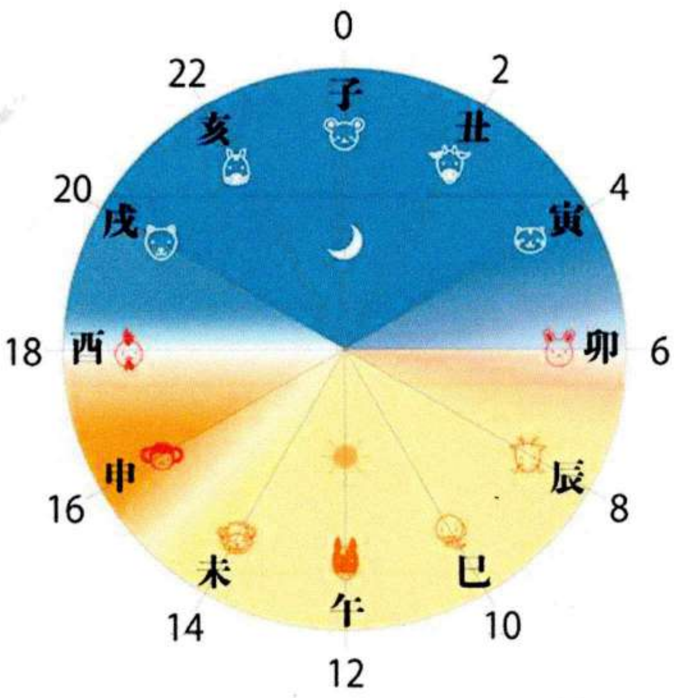
「青楼の画家」が描く、吉原遊郭の一日

吉原遊郭に生まれ育ち、浮世絵の黄金期と呼ばれる一時代を築き上げた版元・蔦屋重三郎（1750-97）。彼の下で、美人画の名手としての才能を開花させた浮世絵師が、喜多川歌麿（1753?-1806）です。吉原を活動拠点に、蔦重と歌麿は遊女たちを描いた数々の浮世絵の名作を世に送り出していきました。のちに「青楼の画家」と称されるほど、歌麿はいきいきと魅力的な遊女の姿を描きました。

現代の私たちが、アイドルのオフショット（という設定）にときめき、業界の裏側に迫る密着取材に興味をそそられるように、江戸時代の人々も、話題の遊女たちの素顔や吉原遊廓の日常をのぞいてみたいと思ったことでしょう。こうした人々の好奇心に応じるように、蔦屋から出版されたのが歌麿の「青楼十二時（せいろうじゅうにとき）」です。

喜多川歌麿「青楼十二時」より　＊いずれもアダチ版復刻浮世絵（画像提供：アダチ伝統木版画技術保存財団）

江戸時代は、一日の時刻を十二支（子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥）で表しました。「青楼十二時」は「子（ね）の刻」から「亥（い）の刻」までの12図のシリーズです。作品を見る前に、十二支を用いた江戸時代の時刻の表現について、簡単にご説明しておきましょう。



真夜中午前０時の「子の刻」から約２時間ごとに「丑（うし）の刻」「寅（とら）の刻」……と一日で干支を一周します。現在私たちが昼の12時を正午と呼び、その前後を午前／午後と呼ぶのは、昼の12時が７番目の「午（うま）の刻」だからです。午の刻は11:00～13:00の約２時間で、さらに一刻を四つに分け、「午一つ」「午二つ」などと呼ぶこともありました。

喜多川歌麿「青楼十二時　巳の刻」　＊アダチ版復刻浮世絵（画像提供：アダチ伝統木版画技術保存財団）

吉原遊廓は昼の営業（昼見世）もあります。この時間になると、遊女たちは髪結いに髪を結ってもらい、入浴をして食事をし、身支度をします。描かれているのは湯上りの遊女。お茶を差し出しているのは、見習い遊女である「新造（しんぞ）」でしょう。妓楼には他に「禿（かむろ）」と言って、遊女候補の少女たちがおり、遊女たちの身の回りの雑務を手伝っていました。浮世絵にはよく、遊女と共にこのお付きの禿の姿と名前も描き込まれます。

喜多川歌麿「青楼十二時　亥の刻」 ＊アダチ版復刻浮世絵（画像提供：アダチ伝統木版画技術保存財団）

夜も更け、禿が遊女の隣でうつらうつらと舟を漕いでいます。吉原では、客が遊女と二人きりになるまでに、なるべくお金を落とさせる仕組みになっていました。遊女や妓楼のランクによって、遊び方のシステムや予算は異なりましたが、相手が最高位の花魁となると、相応の手順と費用を要しました。宴席を開いて羽振り良く振る舞い、詩歌や音曲、書画などの教養を披露し、一夜限りの殿様気分を味わうのです。客が殿様なら、花魁はお姫様です。煙管片手に盃を差し出す花魁の姿は堂々としています。

夢見る装置としての吉原、浮世絵

蔦屋が版元として活動を始めた頃、吉原は各地に出来た色街に押され、往時の賑わいを失いつつありました。優美な遊女たちを描いた歌麿の美人画は、吉原ブランドの再興にも大きな役割を果たしたと考えられています。この浮世絵の宣伝広告的な役割を考えたとき、ここに描かれているのは、あくまで消費者目線で脚色された、遊郭の華やかな一面に過ぎません。「青楼十二時」の黄に金の砂子をまいたような背景の演出は、遊女たちの姿を輝かせると共に、本来周囲にあるはずの生活感、都合の悪い現実の一切を排除しています。

それでも、この作品が時代を越えて私たちの目に魅力的に映るのは、歌麿の絵筆が、過酷な環境にめげず、矜持をもって生きた女性たちの強さを、しっかりと写し取っているからではないでしょうか。

文・「北斎今昔」編集部

#喜多川歌麿　#浮世絵　#美人画　#蔦屋重三郎

記事をシェア：　ポスト　シェアする　LINEで送る